こたえ 卒業の絵

月 日 名前

標準（ひょうじゅん） ⑦

卒業の絵

美術の時間に、卒業制作の共同画の下絵を決めることになった。話し合いの結果、六年一組のテーマは「未来の町」に決まった。絵の得意な大樹は、さっそく空飛ぶ車や高いビルをえがき、みんなの前に広げた。

「すごい。」

何人かが声を上げたが、ひとみだけは、だまって絵を見つめていた。

「どうかした？」

大樹がたずねると、ひとみは少し迷ってから言った。

「上手だと思う。でも、わたしたちがいないみたい。」

大樹はむっとした。半月もかけた下絵である。その日は、ひとみと一言も話さずに帰った。

帰り道、大樹は通学路の桜並木の下で足を止めた。葉を落とした枝の向こうに、六年間歩いた道が続いている。一年生の時に転んだ坂、友達と寄り道した公園、よくほえる犬のいる家。ふと、下絵の町にはそのどれもないことに気づいた。

翌日、大樹は新しい紙を持って、ひとみの席へ行った。

「あの町の真ん中に、桜並木をかきたいんだ。みんなにも聞いてみたい。どこを残したいか。」

ひとみの顔がぱっと明るくなった。その日の放課後、教室の黒板は、みんなが書いた「残したい場所」でいっぱいになった。

1 六年一組のテーマは何ですか。

未来の町

2 大樹が「むっとした」のは、なぜですか。

ア 半月もかけた下絵に、賛成してもらえなかったから。

イ ひとみが絵を破ったから。

ウ テーマが決まらなかったから。

3 ひとみの「わたしたちがいないみたい」とは、どういう意味ですか。

絵の町には、自分たちの思い出や生活が感じられないということ。

4 大樹の考えが変わったきっかけを、本文をもとに書きましょう。

通学路で六年間の思い出の場所を見て、下絵にはどれもないことに気づいたこと。

おうちの方へ

- 登場人物の言葉の裏にある思いを考えましょう。

© きりんドリル kirindrill.com